みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

P．オチルバト：新生モンゴル国の初代大統領

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001404

小長谷有紀編『モンゴル国における20世紀(2)── 社会主義を闘った人びとの証言』
国立民族学博物館調査報告　71:337-363(2007)

P.オチルバト
──新生モンゴル国の初代大統領

解説
1　生まれ故郷
2　初めてのウランバートル
3　レニングラード留学
4　鉱山技師から大臣へ
5　エネルギー部門の確立
6　1984年8月ツェデンバル解任劇
7　ツェデンバル氏からバトムンフ氏へ
8　ツェデンバル氏の思い出
9　モンゴルの刷新
10　モンゴル国大統領の誕生
11　ツェデンバル氏の家庭生活
12「ツェデンバルの取り巻き」たち

解説

社会主義とりわけY.ツェデンバル書記長に焦点をしぼってインタビューを行う，という一連の調査活動の最後を，私たちはP.オチルバトで締めくくった。彼は民主化後，最初の大統領となった政治家である。すでに彼の自伝『天の時』(1996年刊)は邦訳され，『モンゴル国初代大統領オチルバト回想録』というタイトルで2001年に出版されていた。政治家たちが回想録を出版するのは現在，普遍的に認められることであるが，彼の回想録はまさにそうした流行の先駆けであった。彼には書かずにはいられない理由があったのである。

今日では，民主化勢力であれ，人民革命党であれ，政治は少なからず利権で動くものだという点で一致していることを国民はよく承知している。しかし，いまだ民主化してまもない1993年当時において，社会主義時代を率いてきた人民革命党と民主化の原動力とみなされていた諸政党とは，大きく異なる政治グループでなければならないはずであった。にもかかわらず，P.オチルバト氏は旧来の支持政党であった人民革命党からの推薦を得ることができなかったため，やむなく民主化勢力の側からの推薦を得て大統領選を戦い，再選を果たした。このような転身について，後世から批判されないようにするためには，自ら時代状況を説明しておく必要があったのだ，と思われる。

彼からのインタビューは，2005年6月12日，ウランバートルのホテルの一角で行った。多忙な彼は着席するなり，小さくため息をついた。回想録があって，しかも邦訳もされているのに，わざわざ改めて語ってもらうだけの理由を何とか見出して説明すると，今度は大きくため息をつくのだった。「ああ，しかたないなあ，もう」とでも言いたげに。決して語りたくて語るわけではなく始まったインタビューではあったが，母を思い出しては目にうっすらと涙を浮かべ，情熱を込めて過去を再現してみせる彼の語り口は，天性の演説の才能を見せつけた。

とりわけ貴重なのは，彼の人生そのものとしてではなく，彼の目撃したY.ツェデンバルに関する証言である。そもそも自伝においては，Y.ツェデンバルとの関係については言及されても，Y.ツェデンバルの生活について言及される必要はなく，書かれていない。こちらの訪問の意図を了解したうえで語られたY.ツェデンバルと彼自身との比較に関わる言及は，同じく国家の首班を任じた彼ならではの考察結果であり，人間Y.ツェデンバルを心情的に理解するうえできわめて有益である。そしてそれはまた同時に，モンゴルにおける社会主義時代の政治がどのようなものであったかを雄弁に物語っている。

文　献

オチルバト著，内田敦之他訳
2001 『モンゴル国初代大統領オチルバト回想録』明石書店。

ＰＯ：ポンサルマーギーン･オチルバト
ＩＬ：イチンホルローギ－ン・ルハグワスレン
ＫＹ：小長谷有紀

1　生まれ故郷

ＫＹ：モンゴル国の初代大統領であったポンサルマーギーン・オチルバト氏にお目にかかれて，私たちはたいへんうれしく思います。今回のインタビューを，あなたの幼少期の回想から始めてはいかがでしょうか？いつ，どこでお生まれになったか，ご両親やごきょうだいのことをお話しいただけますか？
ＰＯ：私は1942年にザブハン県のトゥデブテイ郡のボンハントというところで生まれました。その場所には13世紀ころのモンゴル人の先祖を埋葬したボンハン（墓）が７～８ヶ所あるので，ボンハントと名づけられたのでしょう。
私の父はゴンスィン・ゲンデンジャブと言いました。ガロータイン寺院の高位の僧侶でした。占星学を修めたとか。その後，還俗して母と結婚しました。
母はツォクティン・ポンサルマーとい言います。13人きょうだいの長女ですよ。私は長男です。私が５歳の時に父が亡くなりました。母と私たちは父の死後３年は地元で暮らし，その後ウランバートルに移動して来ました。当時，学校は私たちをまったく受け入れてくれなかったのです。母は私の下の２人をよそに養子にやり，私１人を連れてウランバートルに来ていました。すぐ下の弟は父の弟の養子になりました。叔父もガ

ロータイン寺院の高僧でした。僧侶には子どもがいませんからね。末の弟は父が亡くなった時，１歳にもならないくらいでした。その子もよそに養子にやってしまいました。小さな子を３人連れて遠くに行くのは，母にはたいへんなことだったのでしょう。それ以来，弟たちとは会っていません。父は亡くなる時，「息子を学のある人間にしておくれ！」と頼んだそうです。当時，「学のある者」になる場所は唯一，ボグディン・フレー（ボグド寺院）だけだったのですよ。昔はウランバートル市をそう呼んでいました。

ＫＹ：みなさんはボグディン・フレーにどうやって移動して来たのですか？遠距離を移動するのはそう簡単なことではないでしょう？

ＰＯ：まあね，当時はラクダのキャラバンで移動しますからね。ボグディン・フレーに行くという地元の２家族と一緒に移動しました。うちは家畜を数頭とゲルや家財道具を売って，荷役用のラクダを１頭，乗用の馬を１頭，道中の食料にしたり，ウランバートルに着いたら売ってお金にして食いつないだりするためのヒツジを数頭連れて故郷を出たのです。私はラクダに積んだアラグ（燃料用の乾いた牛糞を集めるための籠）に乗せられて来たのですよ。

ＫＹ：アラグに乗っていらしたのですか？

ＰＯ：そうですよ。アラグの中に入れられて来たのです。そのころはまだ８つだったかな。私たちはナーダムを過ごし，７月の半ばに地元を出て，９月の初めにウランバートルに着きました。途中１ヶ月以上かかりました。母の１番下の妹が先にウランバートルに来ていました。母はその妹を頼るつもりだったのでしょうね。そのころ私は小さかったので何も分かりませんでした。しかし，分からないなりに，いろいろなことを考えてもいたように思います。

ザブハンからウランバートルまでは，ハンガイ山脈から流れ出る流れの急な水量の多い川を何度も渡ります。アルハンガイにチョロート川という流れの急な，よく知られた川があります。その川を渡った時のことは今でも忘れられません。ラクダは水が大の苦手でしょう。川岸から離れてちょうど川の真ん中まで来ると，ますます水音が大きくなってきてラクダが浮き上がってしまうような気がしました。母は馬に乗って川を渡りました。私は「お母さんが馬から落ちてしまうかも！」と心配で，ラクダに積んだアラグの中で立ち上がって川を渡っていく母の背を見つめていました。けれど母は「息子よ，アラグから落ちてしまうよ！」と川を渡っていく馬の上から振り返り，振り返りしていました。母と子がこうして互いのことを心配しながらいくつもの川を渡ったのです。私は幼かったけれども，幼いなりに母のことを気遣う強さがあったのです。こんなふうにして私たちはウランバートルに着きました。

母は33歳でまだ若かったです。そのころ，私は父のデール（民族衣装）を被って寝ていました。母に「お父さんのデールにおねしょしてはいけないよ！」と言われていたものですよ。母は数年後に再婚し，弟妹が５人になりました。弟の１人，ドンドブサム

ボーは地元で家畜の世話をして暮らしています。１番好きだった弟は，裕福な家の馬を馬捕り竿で捕まえようとして落馬し，13歳で亡くなりました。もう１人の弟オラーンフーは今，血液センターのセンター長を務めています。妹のジャルガルはスカイ・プラザのセンター長で，末の弟オチルホヤグはボロー・ゴールド株式会社で日本のコマツという車を運転しています。弟妹たちについては，こんな感じです。

2　初めてのウランバートル

ＫＹ：初めてウランバートルに来てどんな感じでしたか？

ＰＯ：ウランバートルに初めて来た時は，人や車が多くて私のようないなかの子どもは迷ってしまいそうなところだと思いましたよ。いなかには車はありませんから。ウランバートルに来る途中，車とすれ違ったのですが，家畜が車に驚いてたいへんでした。着いた時にはウランバートルではもう学校が始まっていたので，その年は入学せず，翌年９歳で小学校に入りました。当時は15歳で１年生に入学する子もいたのですよ。

うちのゲルは「ウンドゥル・ホルショー（のっぽの組合商店）」の近く，その北西にありました。今，「のっぽの組合商店」の建物には美術館が入っていますね。その北東側に若干の民家の塀囲いがありました。その北側に薬局が１軒，その北側にお菓子屋通りがあって，その北側にまた民家の塀囲いが並んでおり，うちのゲルはそこに落ち着いたのです。

当時，ラジオというまるいお皿のような黒いものがありました。いつでも何かしゃべっていました。私たち子どもは初めてラジオを聴いた時，「人はどこにいるのだろう？」と，うしろをのぞいて見たものです。私はウランバートルに来た時，ジャガイモという野菜が食べられませんでした。ジャガイモというのはとにかくまずくて，土臭い味のする嫌なものでしたね。人参という野菜があるでしょう。人参はとても甘い味がする野菜ですよね。私たち子どもはそのまま生で食べていました。そんな子どもだったのですよ。アムガランバートル区の第８学校は1932年に創立されました。私は1951年，その学校の第１学年に入学しました。

ＫＹ：そのころ，そこにお知り合いはいらしたのですか？

ＰＯ：私にどんな知り合いがあるものですか。母はそこで暮らしていた人と結婚しました。初めて学校に行った時は友だちと一緒でした。８月25日でした。私たちは入学手続きをするつもりで行ったのです。今は学校に入る子どもたちは入学手続きの時に両親に連れられて花束を持って，新しい服を着て，たいそうおめかしして行きますよね。とても楽しい祝日になっています。私たちのころはそうではありませんでした。

２人でその学校に行くと，大勢の子どもたちが集まっていました。長い机に大勢の先生がたが座って手続きをしている様子です。そこで私たちは１人の先生のそばに行

きました。私は「僕たちは入学手続きに来ました！」と言いました。するとその先生は「姓名を言いなさい！」と言いました。「姓名って何のことだろう？」私はわからなかったのです。それで黙って立っていると，その先生は「父親の名前は何というのだ？」と聞きます。私は「お父さんはいません！」と答えてしまいました。するとその先生は「母親はいるのか？」と言いました。「はい！」と言いました。その先生は「母親は何というのだ？」と聞きます。私は「ポンサルマーです！」と言ってしまいました。こうして私は〈ポンサルマーギーン・オチルバト（ポンソルマーの息子オチルバト）〉という名前で学籍簿に登録されたのです。ポンサルマーという母の名前で手続きした理由は2つありました。まず，父は僧侶でしたから父親の名前をみだりに口にしないものなのです。そのうえ，故人になっていますから絶対にいけません。タブーなのですよ。これは昔からの伝統です。それだけでなく，「お父さんの名前を言ってしまったら，この先生はどうするつもりだろう？」という考えが浮かんだのだと思います。当時，僧侶の子どもは自分の出自を正直には言いにくかったのですよ。僧侶たちは「黄色い封建領主」と呼ばれ，階級の敵とみなされていました。こういう人の子どもは，なかなか自由に学校に入ることができませんでした。まずだめでしたね。そのころ，私にはすでにそういう分別がありました。そういうわけです。さて，こうして学校に入りました。成績は優で，まじめな良い子でした。

KY：少しやんちゃでいらしたのではないですか？

PO：やんちゃといっても，ほんの少しだったと思いますよ。そうじゃないとね。

KY：当時のアムガランバートル区はどんな様子でしたか？

PO：アムガランバートル区はウランバートルの東側ですよね，あなたがたも知っているでしょう。「アムガランバートル・ガツァー」と呼ばれていました。ずっと昔から商売人や漢人商人が住んでいました。立派な堂がいくつかありました。そこにはスフバートル将軍記念人民模範吹奏楽クラブがありました。モンゴルの舞台芸術の著名人を多数輩出したところです。アムガランバートル区はスフバートル将軍の生地なのです。彼の父親の「白衣のダムディン」がここに住んでいました。

アムガランバートルはウランバートルの中でもとてもめずらしい特別な場所なのですよ。ウランバートルの東側にもうひとつ別のめずらしい場所があったのがオラーン・ホアラン（赤い兵営）です。そこにはホアラン（兵営）があって，軍の幹部が住んでいました。私はそのころは少し大きくなっており，15〜16歳になって早く学校を卒業し，専門職を身につけた人間になって母を養いたいという思いが片時も心を離れませんでした。「お母さんは僕を一人前にしようとしているのだから！」と思っていたのかもしれませんね。心の中で母をとても愛し，尊敬している子どもだったと思いますよ。

やがて7年生の時，8年生の試験を受けようとしました。その時は飛び級受験がありませんでした。翌年8年生の時に9年生の試験も一緒に受けて10年生に進んでしま

いました。やがて私は1960年に首都の10年制第14学校を卒業しました。そしてソ連のレニングラード市（現サンクトペテルブルグ）の鉱業大学に留学することになりました。

3　レニングラード留学

ＫＹ：あなたはその大学を自分で選んだのですか？

ＰＯ：自分で選んだのではありません。私自身はジャーナリストになりたかったのです。「ロモノーソフ記念国立総合モスクワ大学ジャーナリズム学部で勉強するぞ！」と思っていました。それがだめになったわけですが。当時，モンゴル人民革命党中央委員会が「成績優秀な男子生徒を鉱業専門分野の学校に留学させる必要がある！」という指示を出したのですよ。それでレニングラード市の鉱業大学に留学することになりました。当時，中学校で成績が優の生徒たちの中から選りすぐって選抜試験を受けさせ，合格したら外国に留学させる制度でした。ロシアの大学に留学し，専門を修得するというのはたいへん幸運なことであり，長期にわたってモンゴルの若者たちの夢でした。普通の牧民や作業員の子どもたちにソ連の大学に無償で留学するチャンスを与えていたことは，社会主義時代の非常に優れた点ですね。

私が学んだ鉱業大学は1773年に創立された世界初の技術学校の１つです。すばらしい学校ですよ。私はこの学校を1965年に鉱山技師専攻で卒業しました。1990年に再びこの学校に行って理学博士の学位を取得しました。いつの時代もロシアの技術教育の水準は世界のトップクラスに入っていますよ。最近ではモンゴルからロシアに留学する人の数はかなり減りました。レニングラードは世界に２つとない偉大な，美しい歴史都市です。だいたい私の知る限りではロシアで１番の美しさです。人も優しくてとても親切です。モスクワの人たちはそうではありませんよ。人が多いとああなるのでしょうかね。レニングラードの通りや広場は美しく，建物や通り１つ１つに歴史があると言ってもいいでしょう。大きな港町です。ピョートル大帝が町の基礎を作りました。ロシアの「西ヨーロッパを見る窓」と呼ばれていますね。1917年の十月革命以来，V.I. レーニンがロシアの首都をモスクワに移転するよう決めたでしょう。以来，ロシアの「北の首都」と命名されました。

私は在学中の1965年に結婚式を挙げました。妻のツェベルマーとは同じ中学校に通っていました。私が８年生の時，ツェベルマーは５年生でした。うちには娘が２人います。上の娘オチルマーはモスクワ市の大学に留学し，工学経済を専攻しました。今は在モスクワ・モンゴル大使館の通商担当書記官をしています。下の娘オユマーは北京大学を卒業しました。アイヴァンホー・マインズ社の経営管理部門に勤めています。

4　鉱山技師から大臣へ

ＩＬ：卒業して帰国すると，まずどこに就職されたのですか？

ＰＯ：卒業して帰国すると産業省の重工業課で鉱山担当の専門官として勤務しました。当時の産業大臣はP.ダムディン氏でした。1960年，P.ダムディン氏は29歳でモンゴル国産業省の大臣に任命されていたのですよ。私が帰国したころ，わが国には専門家がほとんどいませんでした。そのころ，シャリン・ゴル炭鉱が操業を始めていました。そこでは主にソビエトの専門家たちが働いていました。モンゴル人技師が必要でした。1967年１月からこの炭鉱の技師長に任命されました。私が行く前はミハイル・アダモヴィッチ・ナワサルデャンツというロシア人が炭鉱の技師長として働いていました。

1960～70年代にモンゴル国の鉱山部門の集中的な発展期が始まりました。ナライハ炭鉱が改良され，シャリン・ゴル，アドーン・チョロー露天掘り炭鉱が操業を始めていました。ほとんどすべての県で炭鉱が開発されました。私はシャリン・ゴル炭鉱で６年ほど働き，1972年に燃料・エネルギー生産・地質省の副大臣に任命されました。当時，この省の大臣はM.ペルジェー氏が務めていました。産業省から分かれて燃料・エネルギー生産・地質の独立した省が設置されたのです。

ＫＹ：当時，省の副大臣を任命する際にはどのような規則に従っていたのですか？モンゴル人民革命党中央委員会政治局がこの問題を討議していたのですか？

ＰＯ：討議します。必ず討議します。その会議には政治局の局員，准局員が全員出席するのです。モンゴル人民革命党書記長Y.ツェデンバル氏が自ら議長を務めます。私を副大臣に任命する会議も彼自身が議長を務めました。Y.ツェデンバル氏は私を会議に出席している政治局局員に紹介したあと，「さあ，自分の経歴をロシア語で述べよ！」と言いました。それで私は立って，今君に話しているように自分の経歴を述べました。ロシア語でね。

もともとY.ツェデンバル氏とは1971年に初めて会ったのですよ。私がシャリン・ゴル炭鉱の技師長だった時，モンゴル人民革命党第16回大会が開催されました。私はこの会議に代議員として出席したのです。当時，党大会の代議員に選ばれることは責任の重い大仕事でしたよ。工場や職場から勤務評定によって最も優れた人間が党大会代議員として選ばれていたのでした。私もまたちょっとした人間だったのですよ。ダルハン市から選ばれたモンゴル人民革命党大会代表団のメンバーに入ってウランバートルに来ました。当時Y.ツェデンバル氏の威信はたいへんなものだったのですよ。私たちのように現場で働いている者が会えるというのは「大きな幸運！」と思われました。ただし，そういう偉い人ですから怖いし不安だし。私だけではなく，誰だってそうだったでしょうけど。

ＫＹ：あなたは燃料・エネルギー・地質省の副大臣を何年なさったのですか？

ＰＯ：副大臣として私は４年働きました。1976年に燃料・エネルギー・地質省が分割されて，燃料・エネルギー省と地質・鉱産省という２つの省が設置されました。一方が石炭産業と電力の問題を担当し，他方が地質調査と非鉄金属の問題を担当するようになったのですよ。1970年半ばからモンゴルの産業発展に大きな進歩が見られました。国内の電力需要が急激に増え，電力を供給する発電所が建設され，多数の炭鉱が操業を開始しました。ダルハン市とウランバートル市をつなぐ電力網ができました。ウランバートル市に新設されたたくさんの集合住宅に電気と暖房を供給する必要が生じました。他県のエネルギー問題も非常に厳しく問われ始めていた時期です。ウランバートル市の新たな電源建設や，ソ連のシベリア・エネルギーシステムに連結して電力を購入する問題の解決が喫緊の課題でした。

その一方，地質探査の質をこれまでにないレベルに高め，モンゴルの鉱産資源を探査し，発見した資源をコメコン加盟国の需要，とりわけソ連の需要に対して供給することが要求されていた時期です。そのために鉱産資源の探査を自力で行う必要が出てきました。こういった理由でこの２つの省が新設されたのです。こうして私は燃料・エネルギー省の大臣に任命されました。この時再びY.ツェデンバル氏に会いました。

ＫＹ：またご自分の経歴をロシア語で話して差し上げたのですか？

ＰＯ：いや，しませんよ。その時はもうよく分かっていましたからね。

M.ペルジェー大臣と私が行くと，Y.ツェデンバル氏はモンゴル人民革命党中央委員会政治局局員兼書記のD.モロムジャムツ氏と一緒に自室にいました。私などは下っ端でしょう。それでなるべく下座の方へ座りました。するとY.ツェデンバル氏が「君，こっちに座りなさい！」と自分の隣の空席を指すのです。そこで私はその席に行って座ってしまいました。そうするしかなかったのです。私はM.ペルジェー大臣の上座に座ってしまったのですよ。秩序を逸したことになってしまったのです。

するとY.ツェデンバル氏は新たな省を設置する必要性が生じた件について，先ほど話したようなことを述べたのち，「P.オチルバト，君を燃料・エネルギー省大臣に任命することについて我々は討議している。この問題に対する君自身の意見を聞こうと思う！」と言うのです。

私はこのような問題が討議されることをあまり知らずに来たので，かなりうろたえました。そして「エネルギー省の設置は正しいと思います。さらに新しい省の大臣に私を任命する問題が討議されております。私にはこのたいへん重要な，責任ある部門の省の大臣は務まらないと思います。私はエネルギーが専門ではありません。エネルギーのことは知りません。私は鉱山が専門の人間なのですよ！」と言いました。ところがY.ツェデンバル氏は「君がこの分野の仕事を知らないと言っているのはたいへんいいことだ。君は若い。知らないことは今すぐ勉強して，この仕事をするんだ。君がこういう姿勢だということは私が政治局に伝えよう。もうすぐ政治局の会議が始まる。君たちちょっと

待ってくれないか」と言いました。

それから20～30分して政治局の会議が始まりました。Y.ツェデンバル氏は「同志P.オチルバトを燃料･エネルギー省の大臣に任命することを提議する！質問のあるものは？」と言いました。集まった政治局の局員たちの中に私に質問する人はいませんでした。全員挙手して承認されてしまいました。M.ペルジェー氏は地質・鉱山省の大臣に任命されることになりました。M.ペルジェー氏には質問が集中しましたね。当時，社会主義諸国の経済相互援助会議（コメコン）は，その加盟国における天然資源の探査，採掘，共同利用に関するさまざまな事業の計画に着手したのです。それでモンゴルの地質学者は大体現在の段階でどんなものを発見しているのか，今後新たに見つかりそうなものは何か，エルデネト以外にはどこがある？といったことをM.ペルジェー大臣に質問していたのですよ。新たな目標や任務を課すつもりだったのでしょうね。そして２人とも承認されました。

5　エネルギー部門の確立

ＫＹ：省の正式な大臣の仕事を引き受けていかがでしたか。とてもたいへんな仕事でしたか？できたばかりの省を組織することになったのでしょう。

ＰＯ：私はおよそ，いつも，新しいものに当たる人間なのですよ。シャリン・ゴル炭鉱で最初のモンゴル人技師長になりましたし。あそこは110万トンの石炭を産出する生産力があって，積載量40～50トンの「Belaz（ベラルーシ自動車工場製の車）」で石炭を運び，鉄道を利用している炭鉱だったのです。当時モンゴルにはそんな炭鉱はありませんでした。これはわが国初の大規模炭鉱でした。何もかも新しかったのです。機械も新品，人も新人，その機械を使いこなす専門性や経験を備えたベテラン鉱夫がいませんでした。短期講習で運転手になった人びとがあの強力な，新しい機械の使い方を身に着けるのは，とても難しいことですよ。機械の故障はしょっちゅうでした。すると故障した機械を修理しなければならなくなる。こうしてまず壊し，次に修理してみて，ようやくものになるのですよ。作業員，作業班長，機械技師たちはみな，学校を出たばかりの若者で経験がありませんでした。そういう集団を統率し，中央の各地区に石炭を供給するには，たいへんな努力が必要でした。

この仕事は常に国家の関心の中心にありました。どこかの発電所でほんのわずかなあいだでも石炭の供給が途切れでもしたら，大騒ぎになり，口論が起きました。指導する仕事をしたことのない人間が赴任したのですからね。このような状態で働くうちに省の副大臣になりました。この仕事も私にはとても勉強になったと思います。副大臣というのも，上にまだ上司がいるでしょう。だから意味があるのですよね。ただし，省の雑用を全部やるのです。省のいわば肉体労働者が副大臣なのですよ。正式な大臣はまだいい

ですよ，副大臣らに主な仕事をやらせてしまえますからね。それに優秀な補佐がいればずっと楽ですし。省を新たに編成するのも，およそ簡単なことではありませんでした。それでもとにかく，大臣の仕事を9年やりました。その後，対外経済関係国家委員会の委員長に任命されました。

KY：どうしてそういう仕事をすることになったのですか？まったく違う分野でしょう？

PO：そうなのです，まるっきり畑違いですよ。それはともかく，これにもわけがありましてね。私は1度，Y.ツェデンバル書記長に申請書を提出しました。1982年の終わりのことでした。私はその申請書で「省の大臣の重職を解き，モスクワにあるコメコン附属指導研究所に学術研究員として派遣していただきたい！」と願い出たのです。

IL：ご自分からそういう提案をされたのですか？大臣の職を辞す理由があったのですか？

PO：辞任する理由はありましたよ。とにかくね，いろいろあったと思います。Y.ツェデンバル氏は私のこの願い出を認めませんでした。「健康に不安があるなら治療を受けなさい。そしてこの仕事をするのだ!」と言うばかりでした。こうしてY.ツェデンバル氏の承認が得られぬまま1985年を迎えたのです。1985年に先ほど話した新しい仕事に任命されました。

KY：そういう委員会は新しく作られたのですか？

PO：いえ，前からありました。B.サルダンという人が委員長をしていました。その人は健康上の理由でこの仕事を辞めたのです。彼は駐ハンガリー大使に任命されていましてね。私をエネルギー分野のきつい仕事から外して楽な仕事に移したわけです。といっても，国家委員会の委員長の役職は省の大臣級の役職なのですけれどね。でも炭鉱に入ることもないし，発電所の騒音からも離れて，外国に行くことがほとんどで，楽しみも多く，きれいな白いシャツを着ていられる仕事ですよ。炭鉱では白いシャツなんて着ていられませんからね。こうしてブルーカラーだか，ホワイトカラーだか，冷やかしでそう呼ばれる，そんな肩書きの仕事をすることになりました。

6　1984年8月ツェデンバル解任劇

IL：1984年8月に開催され，Y.ツェデンバル氏の問題を取り上げて討議し，彼をすべての役職から解任したモンゴル人民革命党中央委員会第8回総会にあなたは出席されたのですか？会議でのできごとを説明していただけますか？

PO：出席しましたよ。1984年，私はエネルギー省の大臣をしていましたからね。モンゴル人民革命党中央委員会のメンバーで人民大会議の代議員でした。私は省の大臣ですから国の選挙には全部出るのですよ。当時は民主的な選挙はありませんでした。私は

人民大会議の代議員に３回選出された人間ですよ。当時選挙がどのように行われていたかについて簡単に説明しましょう。

たとえば私を第60選挙区に指名します。モンゴル人民革命党中央委員会が推薦するんですよ。そして私を宣伝する２人の「宣伝員」を任命します。私はその２人と一緒に自分が推薦された選挙区に行きます。その２人は私を天まで昇るほどほめちぎります。「このP.オチルバトはまったく本当に，たいそう優秀な人物ですよ！」とほめる。その選挙区には私以外の者は出馬しません。対抗馬はいないということですよ。選挙区の有権者は全員選挙に行って，全員私に投票しなければなりません。選挙区委員会は選挙区の有権者を全員投票に来させるという実に厳しい任務を課されていたのです。選挙区での選挙年齢の人びとの投票率は99.99％でなくてはなりませんでした。もしこの指数がたとえば97.98％だったとしたら，選挙区委員会の者は処分を受け，処罰されました。「なぜ選挙区の選挙年齢の人びとを全員投票に来させなかったのだ？」と，大問題に発展するのですよ。だから彼らは重大な責任を負っていました。彼らは担当選挙区の住民を調査して政治に関心がない人とか酒飲みを特定し，その人の家に行って「選挙の投票日は家にいてください！投票に来てください！」と事前に頼んでいましたよ。そして投票日にはわざわざ係の者をその家へ行かせ，連れて来て投票させていました。こういう人が投票日に「選挙は私に関係がない！」と行ってほかの仕事に行ったり，酒宴に行ったりしようものなら，大事件になります。当時の法律では18歳以上の者に選挙権と被選挙権がありました。今でもあります。ごくまれに権利が剥奪されることもあります。

選挙の「投票用紙」には「ポンサルマーギーン・オチルバト」と１人の名前が書かれています。投票する人は「投票用紙」の上に何も書きません。そこに書かれた名前を丸で囲みもしません。投票用紙を折って投票箱に入れればよいのです。こうしてその人に投票します。もし，その人に投票したくなければ，投票用紙に書かれた名前の上に線を引いて消してもいいのです。けれども，人びとはその名前をほとんど消しません。だからP.オチルバトも100％か，99.99％の票を得ます。こんな単純な選挙システムだったのですよ。そんな次第で，私は人民大会議の代議員として３選を果たしました。1990年には４選しました。

ただし，1990年の選挙は以前の選挙とはまったく違う選挙になりました。当時はモンゴル人民革命党以外の政治勢力が出てきた時期だったので，78人が１議席を争ったのです。ものすごい激戦になりました。社会主義時代の選挙の時は私を賞賛する「宣伝員」を任命してもらっていたのですが，民主主義時代の選挙ではいなくなったのです。選挙戦を戦っている私たちは自分で自分をほめることになりました。そうしないと選んでもらえないでしょう。「私は本当にたいへん優秀な人間です。私のほかに優秀な者は誰もいませんよ。私はずば抜けてすばらしい人間ですよ！」などと自画自賛しなければ

ならなくなりました。そして聴衆に「みなさん，どうか私を選んでください！」とお願いするようになりました。

私は1990年の人民大会議選挙をシャリン・ゴル選挙区で戦いました。もともとはウランバートル市のヤールマグ丘選挙区から出馬しました。そしてその区で選挙戦の準備をしていると社会民主党の面々が来て「あなたはここで〈泥よけ〉になる（邪魔をするの意）のはやめてくれ！ほかのところへ行けよ！我々はこの選挙区でずっと運動してきたのだ。当選は確実だ。あなたはこの選挙区でうちの候補を倒して台無しにしようとしているよ！ここから出ていったらどうだ！」と言いました。それで私はシャリン・ゴルの方へ行きました。そこで働いていましたからね。行って「みなさん，私を選んでください！」と頼めば，選んでくれるはずなのですよ。そして70数％の得票率で当選しました。まずまずでしょう。

ＩＬ：そのころ，モンゴル人民革命党中央委員会のメンバーはどのように選んでいたのですか？

ＰＯ：中央委員会のメンバーは党大会で選出していました。といっても，これも政策で選ぶのですよ。初めに「この人を選んでください！」と推薦します。当時，大臣や高官はすべて中央委員会メンバーだったのです。私は中央委員会のメンバー，人民大会議の代議員になりました。国や党の選挙があって，閣僚ですから，大臣はたいしたものじゃありませんか。そして，対外経済関係国家委員会の委員長になりました。これが1985年ですよ。

このころはわが国にとっていわゆる注目すべき時期です。というのも，わが国の経済は全面的にソ連の援助の上に成り立っていました。経済，社会の発展の懸案についてはすべてソ連から何らかの援助供与があれば計画を立てることができ，なければ計画を立てることはできませんでした。金がないのに何を計画するのですか？そうでしょう？この計画はソ連と５年前から調整することになっていました。1985年４月に私はそういった調整のために派遣命令を受けてモスクワに行きました。コメコン加盟国の経済常任委員会の会議がありました。私はその会議に出席し，社会主義諸国の対外経済問題担当の大臣や高官に会って挨拶をしました。そこで「私はこういう者なのですが，みなさんにご挨拶させていただき，今後，協力し，関係を樹立したいと思っております！」と言い回ったのです。当時はM.S.ゴルバチョフのペレストロイカが始まっていた時期です。そのため，東欧の社会主義諸国がこぞって，どうする？何をする？と言っていた時期です。当時，社会主義国の中で西側の資本主義諸国と経済の面で最も幅広い関係を持っていたのはユーゴスラビアとハンガリーでした。他の国もまずまずです。ポーランドはかなり自由にやっていましたね。ハンガリーでは1956年，チェコスロバキアでは1968年に政府の政策に対する大規模な抗議事件が起きました。東欧の社会主義諸国が成功体験をはっきりと語るようになっていました。私がこの分野の仕事を始めたのは

ちょうどこういう時期でした。わが国でも新たな方針が打ち出されました。私は新米ですから大胆でしたね。いろいろなことを言っては「以前はどうだったかよく知らないのです，申し訳ない！」と自分の意見を押し通し，承認させるのに都合が良かったのです。

当時，ソ連の技術的・経済的援助をわが国が利用する場合，２つの方式が大半を占めていました。ひとつは〈鍵を受け取る〉方式でした。ソ連側が工場や事業所といったものをすべて自前で建設し，すぐ使えるようにしてこちら側には鍵を渡すだけでした。こういう方式ではこちら側の関与する余地はありませんでした。私たちはこのような方式の援助をできるだけ減らす方針を立てていました。その代わりに工場や事業所の建物は自分たちで建設し，必要な設備機器をソ連からこちらに供与する方式への移行を目指していました。このような方式にはかなりの利点がありました。何よりもまず，モンゴル人が仕事をするチャンスができました。次に，最も重要なのが経費の大幅削減でした。というのは，ソビエトの専門家たちには非常に高いコストがかかっていたのです。

ＫＹ：外国人専門家の経費はモンゴル側が負担していたのですか？

ＰＯ：そうなのです。彼らの経費は全額モンゴル側が負担していたのですよ。外国人専門家の経費は全額，借款から支出していました。ソ連の借款というのはこういうものでした。ソ連はこちらに借款を供与したら，そのかなりの部分を専門家の経費という形で取り返していたのです。それはこちらに負債として残るのですよ。専門家たちは非常に高い待遇を要求していました。借款はこのような，最も無駄な形で費やされていました。それに監査もきちんとしていませんでした。ソ連側は「さあ，これは60億ルーブルの工場ですよ！」と言ってこちらに引き渡すのです。そのうちの何百万ルーブルが何に使われたのか知る由もない。予算の内訳はこちらに渡しません。ぜんぶひっくるめてどさっとよこします。私たちはそんな借款をわけもわからず受け取っていました。そしてその60億ルーブルはこちらの負債帳簿に繰り入れられ，記入されてしまいます。つまり，私があなたから何トゥグルグ借りるのか勘定して受け取ることはできず，その代わりそれを貸しているあなたの言った数字を無条件で，わけもわからず受け取っている，ということですよ。私たちはこのような状況を変えようとしていました。

私たちは当時ウランバートルで運営されていたソ連の建設トラストで働いていたモンゴル人作業員の増員も目指していました。そこで働いているモンゴル人作業員はごくわずかでした。当時，モンゴルではソ連の大きな建設トラストが３ヶ所運営されていました。すでに時代は変化の様相を呈していたので，私たちは与えられた機会を最大限に利用しようと考えていました。私たちの提示した懸案の数々をソ連側はほぼ受け入れました。

私は対外経済関係国家委員会に1985年に赴任したでしょう。1987年に構造改革を行ったのです。通商省，対外経済関係国家委員会，資材・機械設備供給国家委員会という３つの大きな組織を統合して対外経済関係・供給省を設置しました。私はこの新しい

省の大臣に任命されました。これは供給，通商，借款，援助を合わせたひとつの省でした。ここに勤務している時に1990年の民主化革命に遭遇したのです。1990年３月にモンゴル人民革命党中央委員会が総会を開き，モンゴル人民革命党政治局の総辞職を決定しました。中央委員会の新しい構成委員はゴムボジャビーン・オチルバトをモンゴル人民革命党書記長に選出しました。

当時，私を人民大会議幹部会議長か首相のどちらかに推薦する話があったらしいです。当時はモンゴル人民革命党が依然として政権を掌握していました。新しい政党がようやくできつつあったけれども，その声は微々たるものでした。こんな話がずっと続いた挙句，私を人民大会議幹部会議長に推薦することが決まったのです。私自身の意見は一切聞いてもらえませんでした。ある日モンゴル人民革命党中央委員会総会が開催され，閣僚会議議長の役職にSh.ゴンガードルジ，人民大会議幹部会議長の役職に私を推薦する考えであることが報告されました。それについて１人２人が意見を述べると私たちの推薦が承認されました。こうして1990年12月に人民大会議が召集されました。この会議で私はモンゴル人民共和国の人民大会議議長に指名されました。当時，モンゴル人民革命党が以前から施行していた規則はそのままでした。モンゴル人民革命党政治局が決定したのならば，国家機構はその決定を執行する義務があったのです。こうして混迷の中，私はモンゴル人民共和国人民大会議幹部会議長に任命されました。

ＫＹ：現在の法律ではモンゴル国国家元首，大統領ですよね？

ＰＯ：そうです。でも当時はモンゴルに国家元首という正式な役職はなかったのです。すべてモンゴル人民革命党の決定で動いていたのですよ。モンゴル人民革命党書記長がモンゴル人民革命党中央委員会と政治局の活動を指導していました。人民大会議幹部会は人民大会議休会期間中，国の最高権力を掌握していました。人民大会議幹部会のメンバーは９人でした。この９人のメンバーが会議をして連名で決定を出すのです。

私は人民大会議幹部会議長に任命されてすぐ仕事を引き継いだのではありません。私たちはそのころ毎日会議をやっていたので，引継ぎの暇がなかったんです。討議し，解決する問題が山積みでしたからね。こうして３日間会議をして４日目にJ.バトムンフ氏が人民大会議幹部会議長の仕事を私に引き渡してくれました。

7　ツェデンバル氏からバトムンフ氏へ

ＫＹ：J.バトムンフ氏はそもそもどのような役職に就いていらしたのですか？

ＰＯ：J.バトムンフ氏は1974年から1984年８月まで閣僚会議議長に就いていました。1984年８月中旬に会議が行われ，Y.ツェデンバル氏の問題を議論するためのモンゴル人民革命党中央委員会の政治局会議でJ.バトムンフ氏が議長を務めました。当時，Y.ツェデンバル氏はウランバートルにいませんでした。1984年７月末ごろ，Y.ツェデ

ンバル氏はモスクワへ休養しに行ったのでした。Y.ツェデンバル氏は当初２週間ほど休養するつもりだったようです。８月末になるとモンゴルでは「ハルハ河戦勝記念」の祝典を催します。Y.ツェデンバル氏は戻って来てその祭りに参加するべく準備をし，いろいろな仕事を計画していたようです。この祝典に参加するためにソ連から大勢を招待していました。Y.ツェデンバル氏がモスクワにいるあいだに政治局会議が開催され，彼をすべての職務から解任する決定が出されたのです。この会議にクレムリンの医師であるエブゲニイ・チャゾフがモスクワから参加していました。会議のあと，政治局員のメンバーであるD.モロムジャムツ，T.ラグチャー，Ts.ナムスライらがモスクワへ行き，Y.ツェデンバル氏と会い，政治局の決定を伝えたでしょう。彼らは，解任について「自ら承諾した！」という言を得て戻って来たことになっています。本当は，どうやらこの決定を本人は承諾しなかったようです。「私は必ずウランバートルに戻り，総会に参加する！党の積極分子たちに感謝を述べなければならない！」と言っていたようです。1984年８月23日，モンゴル人民革命党中央委員会の非定例の第８回総会が開催され，Y.ツェデンバル氏をすべての公職から解任する問題が議論され，決定が出されました。Y.ツェデンバル氏は1952年から1974年まで閣僚会議議長を務めており，1974年にその職を解かれて，人民大会議の幹部会議議長に任命されました。と同時に，1940年からY.ツェデンバル氏はモンゴル人民革命党の書記長の役職に就いていたでしょう。ただし，1954年から1958年まではモンゴル人民革命党中央委員会の書記長はD.ダンバ氏でした。1984年８月まではY.ツェデンバル氏が人民革命党書記長と人民大会議幹部会議議長を兼任していたのです。Y.ツェデンバル氏の解任問題は，モンゴル人民革命党中央委員会の政治局で事前に決定が出されていたので，総会での議決に障害はありませんでした。この総会はJ.バトムンフ氏をモンゴル人民革命党中央委員会書記長に選出しました。その後，1984年12月に人民大会議が召集され，J.バトムンフ氏を人民大会議幹部会議長に任命しました。私はモンゴル人民革命党の党中央委員会総会メンバーでしたから，Y.ツェデンバル氏の問題を論ずる総会に出席しましたよ。また，人民大会議にも参加しました。

1990年モンゴル国に民主化運動が起こり，スフバートル広場に若者によるストライキが起こり，モンゴル人民革命党中央委員会政治局に総辞職を要求しました。彼らの要求に基づき，政治局は総辞職を決定しました。1990年３月に行われたモンゴル人民革命党中央委員会政治局総会は，J.バトムンフをモンゴル人民革命党書記長の公職から解きました。その総会で，書記長にはゴムボジャビーン・オチルバトが任命されました。1990年12月に招集された人民大会議は，J.バトムンフを人民大会議幹部会議長の職からも解きました。

8　ツェデンバル氏の思い出

ＰＯ：Y.ツェデンバル氏はたいへんな読書家で，とても勤勉な人なのです。当時の警備は厳重でした。そのうえ，ロシア人妻がとても厳しく，難しい人でした。彼には友人がいませんでした。１人きりで昼も夜も働いている人でした。友人たちと会ってわいわい楽しんだり，ウォッカを100グラム引っ掛けたり，なんてことなどありませんでした。こうしたことをひっくるめて考えると，あの人は非常に辛い状況の中で仕事や生活をしていましたね。

ＫＹ：よく会っていらしたのですか？

ＰＯ：よく会っていました。何度もね。叱責されたこともありました。ある日曜日，同僚のD.ホルツの家で肉を煮て食べ，酒を飲んでいました。２人ですっかり盛り上がり，笑い話をして楽しくやっていると，外からY.ツェデンバル書記長づきの人民委員が入って来ました。彼は，「P.オチルバト大臣，Y.ツェデンバル書記長からの緊急呼び出しです。今すぐ来るように！とのことですよ！」と言います。「Y.ツェデンバル書記長が呼んでいるのだから，緊急の重要な用があるのだな！」と思いました。行くのはいいのですよ。ところが酒を飲んでしまっています。慌てたの何の。私はだいたい酒を飲んでも顔が赤くならない性質なのです。顔色が青白いのです。Y.ツェデンバル書記長の執務室に蒸留酒の匂いをさせて訪れました。ほかにどうしようもなかったのです。とってもおかしなことになったわけです。すると，バヤンゴル子ども休暇施設（ピオネールキャンプ）で火事が起き，建物が１棟焼けたというのですよ。Y.ツェデンバル氏は「その建物が燃えた原因はまだ不明だ。電線が原因で火事になったのかもしれない。今後電線から出火しないように対策を立てるのだ！子どもたちを火の危険から守るため，事前にしっかりと手を打っておけ！」という任務を課しました。

1970年代の半ばだったと思いますが，チリの共産党中央委員会書記長ルイス・コルバランがモンゴルを訪問しました。Y.ツェデンバル書記長は彼を自分の住んでいる第30番館に招待し，晩餐を供したのですね。ところが，その晩，その建物で停電が起きました。こういう時，Y.ツェデンバル書記長はすぐに私を呼ぶのですよ。

ＫＹ：そういう時，Y.ツェデンバル氏は人びととどういう接し方をしていましたか？責任を果たさなかった人びとには厳しく接していましたか？

ＰＯ：そうでもないですよ。Y.ツェデンバル書記長は激怒したり，荒っぽい，意地悪な接し方をしたりする人ではありませんでしたよ。おおよそ，とても穏やかな人でしたね。人を怒鳴りつけたり言い争ったりするようなところはまったく表に出さない人なのですよ。しかし，言葉ではなく文書では，誰それは無責任である，戒告処分にし，処罰する必要がある，ということを指摘していました。これは仕事ですからね。当然のことです。Y.ツェデンバル氏は人間としてはとてもいい人ですよ。記憶力の非常に優れた

人でした。ロシアの将軍たちを，イワン・イワノビッチ・イワノフなんてフルネームで呼ぶのですから。

9　モンゴルの刷新

ＩＬ：モンゴル人民革命党中央委員会の処分を受けていらしたのですよね？
ＰＯ：もちろんですよ，私は戒告処分を受けたのですからね。ダルハン市の発電所の燃料パイプが爆発したのです。その前にウランバートル市の第３発電所でも爆発が起きていました。それで「エネルギー担当は無責任極まりない！大臣P.オチルバトは事故防止策を取っていない！職責を果たしていない！」という戒告を受けたのです。党中央委員会総会の決議が出て戒告するのですよ。「党の戒告」というのは，それは恐ろしい，難儀なものでしたね。普通だったらその戒告は解除されません。戒告が解かれなければもう，どこか別のところへ行くしかありません。
ＫＹ：それで，どうやって戒告を解いたのです？
ＰＯ：そうですね，きっと懸命に働いたからできたことなのでしょうね。それで結局はモンゴル人民革命党中央委員会の決議が出て戒告が解除されました。
ＫＹ：そうして人民大会議幹部会議長に選ばれました。あなたにとっては，これもまたまったく新しい仕事ですよね？
ＰＯ：そうなのですよ。これはまったく新しい仕事でした。このころはたいへん特徴的な時期でしたね。モンゴル国の改革，刷新の最盛期でした。1990年にわが国では約270～280の新しい連合，連盟が登録されました。社会主義時代に活動していたのは，モンゴル労働者組合，モンゴル革命青年同盟，モンゴル赤十字社，モンゴル・ソビエト友好協会といった少数の社会組織でした。1990年に初めて，最初に民主同盟，民主社会運動，新進歩運動が結成されました。また，農牧業協同組合員連合，食品業者連合，運輸業者連合などという組織があらわれました。それぞれがそれぞれの要求をし始めました。これは職業団体を代表した要求でした。それ以外に政党が設立されました。これらが民主化革命を行った闘士たちですよ。

こうして各政党はモンゴル人民革命党と競い合い，私たちと同等の権限を獲得しようとしていました。彼らはこのような目標を掲げて闘い始めました。この中から「モンゴル国の関心，権利，利益！」というものを見分けてふるいにかけなければなりませんでした。「誰から何をとるのか？」ということはたいへん重要な問題でした。「モンゴル人民革命党を！」だけでそのほかを無視することはできないし，「そのほかを！」とモンゴル人民革命党を無視するわけにもいきません。そうなると，政党間の協定が要でした。合意を取りつけるためには何度も会って何時間もかけて話をします。それでようやく妥協点に至るのです。そうしなければ，このそれぞれに意見の違う政党は，自分の意

見に固執したまま頑として動こうとしないでしょう，困ったものです。そうやってなんとかしようと努力していました。

そのころ，一部の人びとが私を「日和見オチルバト」と呼ぶようになりました。当時はリベラリズムなしにはどうにもなりませんでした。つまり，「君の言うことも正しい，君にも得るものがある！」と言わなければならないのです。言えば言ったで「私の言ったことはすべて正しい！」と思われてしまうのですけれどね。

「日和見オチルバト」という呼び方はモンゴル人民革命党の側から出て来たのです。「P.オチルバトはモンゴル人民革命党の党員でありながら党の意見に従わず，どっちつかずの態度を取っているではないか。こんな奴は追放すべきだ！こんな民主化はあってはならないのだ！」と言うのですよね。厄介でした。私たちは何度も執務室に泊まりこんでいました。当時は非常に多くの会議がありました。人民大会議幹部会議長はそのすべてに出席しなければなりません。論争を止めなければなりません。論争している双方を調停しなければなりません。こういう会議は長くかかるのですよ。夜中の２～３時まで終わらない。

ＩＬ：「ダルガ（長）は専門職」とおっしゃって物議を醸していましたよね？

ＰＯ：そうですね，そう言いました。それでえらく批判されました。マネジャーというのは専門職です。ディプロマを取得してマネジャーになるでしょう。このマネジャーという英語はモンゴル語ではダルガという言葉になります。なぜ批判するのか？と私はよく質問していました。マネジャーと英語で言うと専門職になり，モンゴル語でダルガと言うとどうして専門職でなくなってしまうのか？と私を批判する人たちに質問するのです。相手は答えることができません。それなのに新聞紙上にはびっしりと批判を書き立てていたのですよ。

ＩＬ：あなたのダルガの専門は，人民大会議幹部会議長の仕事をしていた時に役立ちましたか？

ＰＯ：リーダーシップという１つの概念があります。私はつい最近，リーダーシップという題の本を書きました。私はこの本を1980年に書いたのですがね。今度はそれを現代のマネジメント理論，戦術と結びつけ，民主主義時代，市場経済時代と関連付けて見ました。こうして見るとリーダーシップ学というのは，いつの時代でも原則としては同じであるということがわかります。なぜでしょう？リーダーシップ学とは木や鉄のようなものを指導することを言うのではなく，人と関わったり，人の仕事をできるだけ効率的に計画したり，人を育てたり，人の知識教養，モラル，資質を高めたり，人を立派な人間にすることを言っているのです。こういう目標を達成できた時に良い集団を形成することができ，それができた時に良い結果を出すことができるのです。人がいないのに勝手にできて発展する技術体系なんてないでしょう。それは人が創っているのです。そうするとマネジメント学，すなわちリーダーシップ学というのは人間育成学です。これ

は学問なのですよ。一方，これはスキルの問題でもあるのです。

ＫＹ：人民大会議幹部会議長の職は何年務められましたか？

ＰＯ：ほんの数ヶ月でしたよ。1990年の３月から９月まで務めました。人民大会議幹部会は憲法に追加・修正を加えました。1960年の憲法の「国家機関について」という章は全面改正しました。小会議，大会議，政府，大統領を備える組織を構成する新たな章の草案を作成し，承認しました。その憲法にあった「モンゴル人民革命党はモンゴルの社会を指導する政治勢力である！」という内容の条文を無効にして複数政党制にする新しい条文を入れました。それに選挙法にも改正を加えました。こうして1990年７月に新選挙法で人民大会議の選挙が行われました。人民大会議を新たに編成し，人民大会議の代議員の中から国家小会議を編成しました。国家小会議はわが国の常設議会の原型になりました。当時，モンゴル国の大統領は人民大会議の代議員の中から選出しました。私は1990年９月にモンゴル人民共和国大統領という新しい役職に選出されたのです。

10　モンゴル国大統領の誕生

ＫＹ：モンゴル国の大統領を選ぶ時，ほかに候補者はいたのですか？

ＰＯ：いました。ツォグトオチリーン・ローホーズが推薦されました。ポンサルマーギーン・オチルバトはモンゴル人民革命党の党員でしょう。「１つの党から１人だけを推薦し，彼を選出してはならない！」として他の諸政党がTs.ローホーズを候補に立てたのです。

ＩＬ：Ts.ローホーズ氏とは以前からのお知り合いでしたか？

ＰＯ：もちろんです。知り合いでしたよ。Ts.ローホーズ氏は世知に長け，忍耐強く，実に教養豊かな人物です。発言をしたり，批判をしたりする時は真っ正直で，自分の見解を率直に表して決して譲らず，上層部の連中におもねることのない，裏表のない人でしたね。

ＩＬ：1964年12月に開催されたモンゴル人民革命党第６回総会でY.ツェデンバル氏をたいへん鋭く批判しましたよね。Ts.ローホーズ氏にはこのように批判する何らかの理由があったのでしょうか？

ＰＯ：あったと思いますよ。国営農場管理局長だったTs.ローホーズ，ウムヌゴビ県の党委員会第１書記だったB.ニャムボー，統計中央局長だったB.ソルマージャブらが批判しました。B.ソルマージャブ氏は「モンゴルの経済はまったく発展していない。それなのにモンゴル人民革命党の大会，総会ではモンゴルの経済は発展している，モンゴルは繁栄している！と言い続けている。その発展とはどこにあるのだ？それは偽りだ，発展しているものなど何もない！」と批判しました。

バルダンドルジーン・ニャムボー氏は「Y.ツェデンバルの仕事のやり方は時代遅れもはなはだしい，誤った人事政策を行っている。モンゴル人民革命党中央委員会の組織，あらゆる指導的地位にオブス県の人間ばかり任命している。Y.ツェデンバルは自分を取り巻く自分の手駒を任命している。ほかの者はどうすればいいのだ？仕事をしてはいけないというのか？」と疑問を呈しました。

ツォグトオチリーン・ローホーズ氏は「まったくもってモンゴルの経済政策は根本からまちがっている。他人をあてにし，援助に依拠して国家を発展させるやり方は世界に例がない。自分でものを作ることを学ばねばならない。自らの可能性を活用せねばならない。これはY.ツェデンバルの行動や政策がまちがっているのだ。この誤った政策を即刻修正し，訂正し，変換せよ！モンゴル人民革命党中央委員会政治局のメンバーを一新する必要がある！外から風も入らず，何もせず，進んで意見を出しイニシアチブを取ることもなく，あらゆる手を使って保身を図った少数の者が居座り続けている！モンゴル人民革命党の政策は根本的にまちがっている！」と批判しました。すると彼らは「お前たちは陰謀を企てた！」と中傷され，「反党グループ」という汚名を着せられて追放されたのです。彼らは反Y.ツェデンバル発言をし，Y.ツェデンバルを批判したのです。モンゴル人民革命党に背いたのではありません。が当時は「党はY.ツェデンバルである！Y.ツェデンバルは党である！」ということになってしまっていたのですよ。この言葉はモンゴル人民革命党中央委員会総会でボギン・デジドという人が初めて言ったものです。この人はバヤンウルギー県のモンゴル人民革命党委員会第1書記，内務省大臣，モンゴル人民革命党中央委員会統制委員会委員長，モンゴル人民革命党中央委員会政治局局員などの職を歴任した人物です。この言葉はロシア語からのコピーでした。ソ連ではレーニンについて「我々がレーニンと言えば党のことだ！党と言えばレーニンのことだ！」という言葉がありました。そういうわけで，当時モンゴル人民革命党というのはY.ツェデンバルになってしまっていたのですよ。このように非常にまちがった傾向があらわれていることをTs.ローホーズらがたいへん鋭く批判したのです。この批判が行われたころ私はソ連留学中でした。

KY：するとこの人たちのことは学生時代に聞いていらした？

PO：そうです。当然，耳にしていました。学生というのはとにかく新しいものには非常に敏感に反応する人種ですからね。「ああ，まったくだ，批判するべきだ！」と言い合うのです。その直前に「知識人の迷妄」と称してかなりの人びとが職を解任され，大騒ぎになっていました。学生たちはこのことばかり話していましたよ。カシミヤの取れるモンゴルの生きた山羊が，ロシアの子どものおもちゃのゴム製の山羊と同じ値段だったのです。学生たちはこういったことを聞きつけては話題にしたものです。

当時は「民族主義者」というレッテルを貼られた人が大勢いました。チンギス・ハーンのことは口にしてはいけませんでした。チンギス・ハーンのことを話した者は「民族

主義者」,「モンゴル文字」と言っても「民族主義者」にされてしまいます。「知識人の迷妄」と言われた処分の際，ビャムビーン・リンチェンなどわが国の偉大な学者の著作を燃やし，本人を投獄してしまったんですよ。「民族主義」がなくてどうして民族が存在し得ますか？「人種主義」とは何のことでしょうか？たとえば「アーリア人種が最も優秀であるべきだ，ユダヤ人は全滅させなければならない！」というのがあったでしょう。これが人種主義です。こういう思想を煽り立ててはいけません。危険です。しかし，モンゴル民族ということを誇りにし，この民族を守らなければ,「モンゴル」と言い張ったところでいったいどうなりますか？それでどうするんですか？中国と一緒になるのか，ロシアと一緒になるのか，日本と一緒になるのか。そんなことはできませんよ。学生や知識人らはこういうことをいちいち批判したり，話題にしたりしていましたね。１人１人が自分自身であってこそモンゴル民族なのであって，人の言うとおりにして，人がやれということをして，人の考えるとおりに考えていたら，ただの「生きた幽霊」ですよ。そんなことではいけません。気持ちや考えがロシア人であってはなりません。ロシアのために，ロシア人のように話したり，考えたりしてはなりません。

ＫＹ：Y.ツェデンバル氏自身はロシア語に堪能だったんでしょう？

ＰＯ：ええ，上手でしたね。Y.ツェデンバル氏自身も「民族主義」をそんなにひどく蔑視したり非難したりするような人ではないですよ。「モンゴル文字」を書くのが上手でしたし。日記は「モンゴル文字」でつけていてね。大体がモンゴル人らしい人でしたね。ソ連を支持し，そういう政策を取ることで援助を得る必要があったんでしょう。援助を獲得する１つの手段ですよ。そうしなければモンゴル国は「民族主義」を維持していたとしても，自立して前進し，大きな成果を得ることなどかないませんよ。金は誰の手にあるのか，その支配下に置かれるのです。わがモンゴルの男性は奥さんに財布の紐を握られています。男は文無しです。給料を持ち帰ると奥さんに渡してしまうのです。そして「100グラム」を引っ掛けるからと奥さんからお金をいただくのですよ。こうして支配下に置かれ，その手に握られているわけです。ソ連とモンゴルの関係は，ちょうどこれと同じことになっていました。

ＩＬ：Sh.ツェベルマー夫人が自由出版のインタビューに答えて「P.オチルバトを１度，食事抜きで寝かせたことがあるのよ！」とお話しになっていましたね。

ＰＯ：これはわが家がシャリン・ゴルにいた時のできごとなのですよ。シャリン・ゴル炭鉱の技師長の月給は1,100トゥグルグでした。1960年代の1,100トゥグルグは大臣並みの給与ですよ。それに炭鉱が計画を達成すれば「褒賞金」ももらっていました。それで月に1,200〜1,500トゥグルグの収入がありました。ところが，うちでは時々お金がなくなってしまうじゃありませんか。それで私はSh.ツェベルマーに「お前はこの金をどうしているのだ？金がないって，どういうことなのだ？」とよく言いました。すると彼女

がある時「オチルバト，あなたが自分でやり繰りしてみなさいよ！」と言いましてね。そこで私は「そうしよう！家計を預かってみるさ！」と言いました。そしてくだんの月給を自分のポケットに入れて大きな顔をしていましたよ。店に出向いて妻子に必要なものを買い与えていました。そんなある日，仕事から帰って来ました。炭鉱の仕事はきついものですよ。かなり疲れていたと思います。家の冷蔵庫には何もありませんでした。肉もないし野菜もない。それで私は「食べるものはないのか？」と妻に少しきつい口調で尋ねました。すると妻は「知りませんよ。あなたが知っているでしょう。あなたが野菜や肉を買うべきなのですよ！あなたが家計を預かっているのでしょう！」と言うのです。ポケットに入っていたはずのお金を見てももうあまりありません。それで，その夜はみなですきっ腹を抱えて寝ましたよ。そして「もうやめよう，このお金は君が持て！」と妻に言いました。それ以来，２度とお金の管理はしません。簡単になくなってしまうので，まったくばかばかしいことです。

11　ツェデンバル氏の家庭生活

ＩＬ：ツェデンバル氏は奥さんがロシア人でしたから，やはりロシア人妻の影響を受けていたのでしょうか？

ＰＯ：当然ありましたよ。Y.ツェデンバル氏が友人もなく，孤立した，孤独な状況にあったのは，あのロシア人妻の影響があったでしょうね。時にはあちこちのパーティーで「100グラム（酒）」を引っ掛けることだって当然あるでしょう。そういう時にあの妻が怒る，文句を言う。政治局の局員らを怒鳴りつけていたのですよ。「あなたがた，Y.ツェデンバルにお酒を飲ませたわね！Y.ツェデンバルをアル中にするつもり？」と，大騒ぎになってね。そういうわけであの人は気の毒に，楽しみってものを知らないのです。政務に打ち込むだけでした。閉鎖的で制約されていましたね。強大な特権があるようでいて，個人的には何の自由もなかった。好きな時に出かけて友人たちと会って郊外の川辺に行ってちょっとぶらついて来る，そんな自由はありませんでした。ロシア人妻に知れたら，おおごとになります。いけません。

モンゴルの家庭に行くと必ず乳茶でもてなしてくれるでしょう。これは私たちの習慣です。ところが，国家特別警備第３局の人たちがそのお茶を取り上げて脇によけ，Y.ツェデンバル氏には自分たちの持ち歩いているお茶を出していたのです。牧民家庭の主人が酒を開けてくれれば，それを取り上げてしまい，自前の「保証つきの酒」を出していました。それはたいていの場合，酒ではなく水なのですよ。そういうおかしなことをやっていたのです。

私は大統領になると，こういう妙なことは全部やめました。牧民の家庭を訪問し，その家の主婦の作ってくれたお茶を飲み，料理を食べ，家の主人の注いでくれた酒を飲ん

で歩いていました。モンゴル家庭のゲルに泊まっていました。その家の奥さん，旦那さん，子どもたちがそこで寝ていますよね。私は上座に寝ます。私はこんなやり方をしていました。それで私は「気さくなオチルバト」という名を頂戴したのです。人民にはこのように親密であるべきなのです。主婦が悪くなったお茶をお客に出すモンゴルの家庭などありません。これはモンゴルの伝統的な習慣です。出されたお茶を飲まなければ，その主婦の心は傷ついたままでしょう。人の親切な心をそうやって傷つけてはいけません。人の出してくれたお茶に口をつけない，飲まない，そんな無作法はモンゴルにはありません。これからだってありえないでしょう。モンゴル人はとても真っ直ぐで純真な心を持っているのですよ。心の底から信じるし，心の底から喜ぶし，怒るのも心の底からなのです。嘘偽りはありません。裏表がありません。人民を信頼せず，敵であるかのように接してはなりません。Y.ツェデンバル氏の時代はそういうやり方だったのです。私はその１つ１つを全部変えました。

ロシアと中国にはどちらにもモンゴル人がいます。内モンゴル，ブリヤート・モンゴル，カルムィク・モンゴル，トゥバとね。みな同じモンゴル人ですよ。私は大統領在任中，チンギス・ハーン生誕830周年を記念し，人民大会議場で盛大な会を開催し，自ら講演しました。そうやってモンゴル人の心に常にあり続けた，繊細なテーマを刺激しました。これは長年禁じられていたテーマだったのですよ。人びとが「ああ，これは実に正しいことだ！」と支持し始めているのです。

モンゴル人は民族の伝統を非常に重んずる人びとですから。いくつにも分裂した中国全土は何百年もモンゴルの支配下にありました。中国の統一国家はありませんでした。これはモンゴル人が建てたのです。何百年ものあいだ私たちはそこに君臨したんですよ。フビライ・ハーンが大元帝国を建国し統治していた歴史は今も色褪せません。これはモンゴルの歴史です。ロシア全体がモンゴルの支配下にありました。チンギスの子や孫らが建てた「大金帳汗国」は何百年も続いていました。その子孫は今もロシアに暮らしています。ロシア全体が「金帳汗国」の影響のもとに勃興したのです。その足跡を受け継いだのです。これはすべて人類の歴史の一部であり，モンゴル人民のたどってきた，自ら成し遂げた，真実の歴史なのです。これはモンゴル人民の歴史です。だから私たちに語られているのではないですか？このすべてを実現したモンゴル人の誇りは，モンゴル人の遺伝子，モンゴル人の脳髄，心，心臓に保たれているのです。社会主義時代にはこれを全部うやむやにし，情け容赦なくぶち壊し，消し去ろうとしたのです。誰だって人に物乞いして生きるのは嫌でしょう？人に支配されるのは嫌でしょう？モンゴル人も同じですよ。社会主義時代にはモンゴル人の嫌うことがたくさん強制的に行われようとしていました。自分とは無関係な理由でこういう状況になってしまったことで，当時人びとの心理は全体的に非常に悲観的な状態になっていました。

民族はどのような時に滅びるのでしょうか？精神が衰えた時にこそ滅びるのだと思い

ます。民族を滅ぼすためには精神を害する必要があるのでしょう。そうやって衰退させ，散り散りばらばらにし，征服するのだと思います。だからモンゴル人の民族の誇り，「民族主義」というものをどうしてもよみがえらせなければならないことは明らかだったのです。こうしてよみがえらせることができれば，みな自立して生活し，自分のため，自分の民族のために生きる気力が戻り，元気が出るのです。「人の力で楽しむより自分の力で苦しむ方がいい」というのはモンゴル人がよく口にする言葉です。これはモンゴルの哲学です。だから「苦しい生活をするのか，楽しい生活をするのか自分で決めよ，仕事をして多くの収入を得て生活を良くしていくのは自分次第，手助けするものは誰もいない，手を合わせて祈って座す必要などない，自分が動けば口も動く，家族や子どもたちは衣食住満ち足りるのだ！」という考え方を作り出す必要があったのです。

わが国では1962年にチンギス・ハーンの生誕800周年記念行事がありました。すると，この記念行事を企画した人たちは全員，処罰されたのですよ。たとえば，Ts.ダムディンスレン氏はこの記念の時に行われた学会で講演しました。それが非難され，著作や作成した「千年史年表」を国立印刷所の敷地で燃やされたのですよ。ビャンビーン・リンチェン氏も同様です。その学会に参加したその他の著名な学者，有識者たちはあちこちに追放されました。たとえば，科学アカデミーにいた者を発電所の化学実験室勤務にするなどして散り散りにし，つぶしてしまうのです。これは例の「民族主義」というものに対する弾圧の１例です。これは国や民族に関する思想弾圧の１つのあらわれです。「民族主義」というのはこうして覆い隠され，はなはだしく衰退していってしまったのです。今は大分復活していますね。民衆は生き生きとしています。

1990年７月11日に私は人民大会議幹部会議長になって初めてのナーダムを行いました。ナーダムはわが人民の，民族の盛大な祝典です。植物と水が釣り合い、馬乳酒や牛乳が豊富になり、人民の心がのびやかになった夏に行います。「足のある者はうろつき，足のない者ははってでも見るモンゴルナーダム！」と言いますね。私は立派なモンゴル・デールを着て姿を現し，ナーダム会場の緑の芝の上にモンゴルのしきたりどおりに敷いた羊の白いフェルトの上を歩み，「九脚の白旗」の傍らに立ち，国歌を歌い，人民に向かって演説しました。この瞬間に大勢の人が涙していたとあとで聞きましたよ。以前もナーダムはずっと行われていました。しかし，人民が涙したり，心を動かされたりするということはありませんでした。１万5,000人を収容するナーダム会場は満員でした。P.オチルバトを見て感動して泣くなんてことはありませんよ。どこにでもいるただの人間です。モンゴルのナーダムをモンゴルのしきたりどおりに行っていることに感動したのです。モンゴルのしきたりがモンゴルの地に戻ってきていることを人びとは感じていたのです。

ＫＹ：Y.ツェデンバル氏はナーダムの開会の辞を述べる時，民族衣装を着なかったのですか？

ＰＯ：民族衣装はY.ツェデンバル氏の時代から禁止されてしまったのですよ。Y.ツェデンバル氏はいつも背広を着て歩く人でした。それにナーダム会場に出て，人民に歩み寄って行かないのです。はるか向こうの大天幕の中から短く演説するだけでした。私はこのやり方を変えました。ナーダムの開会を有名な演出家D.バルジンニャムが企画する際，私も自ら参加しました。新しい時代が始まっていることを人びとに知らせる必要がありました。長々とした演説は必要ありません。

ナーダムの開会のその瞬間が人びとに非常に多くのことを示唆するのです。モンゴル人は遊牧民ですから，情報を常に口で伝えてきた長い伝統があるのです。おじいさん，おばあさんたちは長大な叙事詩，物語，伝説をすべて諳んじており，それを語るのですよ。ヒツジを囲いに入れてしまうと，子どもや若者にそらで物語や叙事詩を語ってやるのです。わが国には作者不詳の長大な叙事詩がたくさんあります。いつ，誰が創ったのかを知る術はありません。しかし，口から口へと語り継がれ，いっそう充実しつつ現在に至っています。ナーダムについてのニュースもこのように口伝てに語られるのです。それはまる１年間，話の種になります。今は定住生活に移行しているので書くことが多くなりましたね。私は大統領在任中に『天の時』という本を書きました。なぜなら「初代国家元首になった人間が何を考えていたか，何をしていたか，自分のした誤りや正しかったこと，失敗や成功について自分で書こう！」と決めたのです。後世，知らない人びとが起きたことをさまざまに憶測して書くでしょうから。

1990年に市場経済というものを本当の意味で理解し，受け入れている人はほとんどいなかったですね。だから当時この件に関する私の発言のいくつかが社会に大きな反響を巻き起こしていたのですよ。当時，私は労働者との会見の席で「国は，鉄の顔を持っているのだ！」と言ってしまったことがありました。市場経済，民主主義制度への移行とはこういうものだと，社会に混乱を引き起こしてはならないでしょう。どんな時代でもまちがった行いをして許されるものはいないでしょう。これはそういう意味の言葉です。ところがこの言葉をめぐってたいへんな騒動が巻き起こったのです。「P.オチルバトはとても厳格で，容赦のない奴だぞ！」と騒がれました。それから婦人用の45トゥグルグの靴，700トゥグルグの靴についての話が大きく取り上げられました。

市場経済の時代には収入額がその人の消費額を決めるでしょう。収入が少なければ贅沢なものは買えませんよね。これは市場が自然に調整しているのです。1990年，市場経済が始まる前の話です。高価な日用品がわが国に入って来始めたばかりのころですよ。社会主義時代に誰でも履いていた，ソ連で製造された45トゥグルグの婦人靴がありました。安くて，履き心地が良くて，品質の優れた良い靴なのですよ。みなに好まれていました。ほかの靴もなかったのですけどね。みなそれを履いていました。当時はわが国だけではなく他の社会主義国でも同じで，日用品の選択肢はほとんどなかったのですよ。おおよそみな，同じようなものを使っていました。1990年代の初めだったと思

いますが，わが国にオーストリア国で製造された婦人靴が輸入されてきました。オーストリアは靴の製造に優れた国でしょう。貿易会社はその靴に700トゥグルグの値をつけ，売りに出したんですよ。もともとの値段はそれよりももっと高かったはずです。なのにみな，この靴はどうしてこんなに高いのかと不思議がり，世間がその話で持ちきりになっていたのです。社会全体でうわさになっていたのです。

そもそもそのころは日用品の価格が上昇傾向にあった時期なのです。そういう時期に「収入が多い者は700トゥグルグか，もっと高い靴を履き，収入が少ない者は45トゥグルグか，もっと安い靴を履けばいい！」という意味のことを言ったのです。すると「P.オチルバトは人民を差別し，格づけしている。高いものを買うグループと安いものを買うグループができることになる！市場経済はこんなはずではない」と騒がれました。これは社会主義時代の「人間はみな同じ，平等である」という考えがそのまま機能している例ですよ。このように多くの問題にぶつかっていました。

12「ツェデンバルの取り巻き」たち

ＩＬ：1990年６月に開催されたモンゴル人民革命党中央委員会定例総会で「Y.ツェデンバルの取り巻き」の問題が取り上げられましたね。そもそもどうしてこのような問題が提起されたのでしょう？「Y.ツェデンバルの取り巻き」というのは，誰ですか？

ＰＯ：1990年３月にモンゴル人民革命党中央委員会政治局が総辞職したでしょう。政府も解散しました。「理由は何だ？ここに勤めていた人びとはモンゴルの人民の前でどんな罪を犯したのだろう？単に解散のための解散ならそれもひとつの理由，罪を犯したのならそれもひとつの理由だ。罪を犯したのであれば彼らに責任を取らせないのか？どのような罪を犯したのだろうか？何がまちがっていたのだろう？究明してくれ！」という声が社会に大きく広がっていました。この時，1990年４月にモンゴル人民革命党臨時大会が開催されました。この大会でY.ツェデンバルと長年共に働いていたモンゴル人民革命党中央委員会政治局局員や閣僚会議議長，副議長をしていた多くの人びとを「Y.ツェデンバルの取り巻き」と定義したのです。そして国家に与えた損害を究明する委員会すなわち作業部会を組織する決定を出しました。この委員会は合計41人を取調べました。こうして1990年６月にモンゴル人民革命党中央委員会第３回総会が開催され，「Y.ツェデンバルの取り巻き」の問題を取り調べた委員会の報告書を取り上げて討議し，それを原則として承認し，総会の決議を出したのです。この決議には７人をモンゴル人民革命党から除籍することが指示されていました。この人びとを非難した主な理由は「Y.ツェデンバルの失政や知識人の粛清などのまちがった行動を制止せずそれに甘んじていた，指導部の融和をはかるという名目で互いに譲歩，迎合し，さまざまな優遇措置や特権を享受し，国の財産を不正に使い，党紀を乱した！」という総括だった

のです。この７人の中にはY.ツェデンバル氏自身も含まれていました。

この総会がこのような決定を出す前，1990年４月６日にモンゴル人民革命党中央委員会政治局は新メンバーで会議を行い，Y.ツェデンバルに国家英雄，労働英雄，元帥の称号を授与した以前の諸決議を無効にすることを決定した第15号決議を出しました。その当時施行されていた法律によって，政治局のこの決定は人民大会議幹部会が執行することになっていました。こうして1990年４月18日，人民大会議幹部会第97号令に人民大会議幹部会議長，書記，幹部ら計８人が署名しました。この命令によってY.ツェデンバルに授与した「モンゴル人民共和国国家英雄」,「モンゴル人民共和国労働英雄」,「モンゴル人民共和国元帥」の称号をそれぞれ剥奪し，モンゴル人民共和国国家英雄の「金の星」勲章，モンゴル人民共和国労働英雄の「金のソヨンボ」勲章とスフバートル勲章，元帥の階級の「星」徽章をそれぞれ没収することが決定されました。

私の率いていた人民大会議幹部会の意思で，Y.ツェデンバル氏がさまざまな場面で授与された国家最高勲章の数々を没収する決定を出したのではありません。当時，施行されていた法律に従ってモンゴル人民革命党中央委員会政治局の出した決定を執行したまでです。

そもそもY.ツェデンバル氏は国内外合わせて40あまりの勲章を授与されたのですからね。Y.ツェデンバル氏は「陸軍大将」の地位にある人でした。そのほかの勲章や称号は手元に残ったのですよ。これは１人の決定ではありません。人民大会議幹部会の決定です。大統領の命令ではありません。この決定をくつがえすことのできるのは人民大会議だけです。

ＫＹ：お時間を割いていただき，たいへん興味深いお話を本当にありがとうございました。

ＰＯ：いいえ，どういたしまして。